

* 下図「フローベール」は、自己のロマネスク(理想人間像C)を語らない。彼の方法は、實證精神即ち「現實(リアリズム=ボヴァリー:A)の醜惡を素材として美(B:ロマネスク・夢想家⇒C理想人間像)を志向する創作方法」とならざるを得ない。右下枠参照。「ボヴァリーの失敗によつて、(リアリズム)小説批評が完成されるのである。「マダム・ボヴァリーはわたしだ」と言つたのは、「自分の夢をそんな形でしか提出しえなかつたからだ」(『小説の運命Ⅱ』P617)。

P74《藤樹(右△枠)が『明徳は其(天下)の大本なり』と言ふ時に、いろいろな時代の優れた思想家(左△枠)に起つた事[左圖参照]が、彼(右△枠)にも亦起つてゐた事をよく考へてみるのが大本である。彼(及び彼等)は、時代の問題(『下克上』『個人主義(左圖)』)を、彼(及び彼等)自身の問題(眼に見えぬ(形而上の)克己劇等と感じてゐた)(小林秀雄著 #本居宣長 八章)
 * ②『明徳は天下の大本なり』③各時代の卓越「思想家(左圖)」⇒からの關係:①が②と言ふ時③に「④起つた事が①にも亦起つてゐた」(D1の至大化)⇒即ち「⑤時代の問題(下克上)」④的(概念F)⇒⑤を「⑥自身の問題(克己)と感じてゐた」(⑤への距離獲得:Eの至大化)⇒①藤樹(△枠)

